2 島後（島根県隠岐の島町）――隠岐水産高等学校

生徒・地域・未来のための水産専門高校

島根県立隠岐水産高等学校　校長　池田 速人

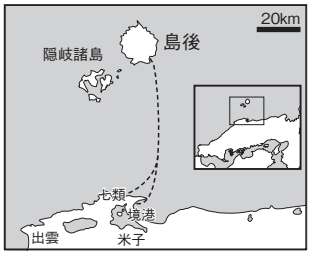
●地域に根ざし、地域とともに歩む学校として

島根県立隠岐水産高等学校（以下、隠岐水産高校）がある隠岐諸島は、島根県松江市の北方、約一〇〇キロメートルの日本海に浮かぶ、有人四島と大小一八〇の無人島からなります。寒暖流入り交じり、豊富な水産資源に恵まれた日本海有数の漁場を周囲に有し、隠岐ユネスコ世界ジオパークにも認定された豊かな自然・文化・歴史を持つ同諸島の、もっとも大きな円形の島である島後（全域が一つの行政区域である隠岐の島町）に本校は位置しています。

当然のことながら、この島においては、過去、現在、そして未来永劫、漁業が主産業であることでしょう。全国には四六校の水産・海洋系の単独高校あるいは水産・海洋系の学科を併設した高校がありますが、島根県には単独高校が二校（本校と浜田水産高校）あります。県教育委員会では現在、今後の県立学校のあり方について検討がなされていますが、水産高校の果たすべき役割や水産教育のあり方については、平成二一年七月に先んじてその方向性が三つの柱として打ち出されました。

①水産高校を水産県しまねの資源（宝）と位置づける
②全国から生徒の集まる水産高校に
③水産高校と水産業・水産行政との連携強化

地方創生が叫ばれるなか、少子高齢化と若年人材流出に歯止めをかけるべく、離島に存在する水産の専門高校である本校は、「生徒のため、地域のため、未来のために水産を教える」学校として、より一層の魅力化を図り、地域定



島後：隠岐諸島の中でもっとも大きな島。かつては沖ノ島と呼ばれていた。平成16年に4町村が合併して隠岐の島町が誕生した。面積241.58km²、周囲211km。人口14,493人（平成28年7月現在）。全域が国立公園に指定されている。

住の使命と役割を担っていきたいと考えています。

●全国六二中学校からの入学生

隠岐水産高校は、明治四〇（一九〇七）年に隠岐の島一一カ町村立隠岐商船学校として創立され、本年で一一〇周年を迎える古い歴史と伝統を誇る水産の専門高校です。①真理と正義を愛せよ、②勤労と責任を重んぜよ、③心身ともにたくましく鍛えよ、の校訓（目指すべき生徒像）のもと、「専門的知識と技能を身につけ地域社会に貢献できる人材を育成する」ことを目標に海運・水産業はもとより、あらゆる産業分野の現場で活躍する人材を育成してきました。明治・大正・昭和・平成と幾多の変遷を経て少子高齢化の時代に入り、平成一五年に海洋システム科（海洋テクノコース・エンジニアコース）と海洋生産科（食品生産コース・資源生産コース）の二学科四コースに学科を再編成し、一学年定員八〇名として現在に至っています。

水に浮かぶ隠岐水産高校。

また、海洋システム科を卒業の後、上級海技士免許の取得を目的として、修業年限二年の専攻科課程（漁業・機関、定員一〇名）を設置しています。現在は本科と専攻科あわせて全校生徒数は一六七名となっています。

老朽化した寄宿舎を平成一四年に改築しました。さらに同二五年の増築により、収容定員は七六名（男子七〇名、女子六名）となりました。現在の入寮者数は五九名（男子五五名、女子四名）です。このうち県外からは広島から関東まで四五名で、県内をあわせるとじつに六二校の中学校から生徒が本校に入学し在籍しています。

島外生徒の増加に合わせ、より一層学校の魅力化を図るため、平成二八年度より隠岐の島町から「魅力化コーディ

ネーター」の配置を受け、ホームページの刷新や生徒募集に努めているところです。また、学校見学の旅費の一部や寮費補助、部活遠征旅費や研修旅行補助など就学のための環境整備もなされてきました。

ここ数年、島根県内の離島・中山間地の高校では、「しまね留学」として県外からの生徒募集を積極的に進めてきましたが、隠岐水産高校への県外からの入学は、すでに二十数年前からありました。中には水産を学びたいという目的を持たない入学者も少なからず存在しました。

そこで、「県外からの生徒募集」をする他の学校と歩調を合わせ、「推薦選抜」の導入と「選抜基準」を明確にしました。結果として、目的意識・学習意欲の高い生徒が入学するようになり、一年次からの進学補習も導入し、国公立も含めて水産系四年制大学への進学実績が上がりました。これは、本校の寄宿舎が学校の敷地内にあることから十分な学習時間を確保できる好環境にあり、常時二名の教員が交代で舎監として寝食をともにし、自習時間以外も細やかに対応できているからではないかと思います。また、集団生活を通して、生徒たちがお互いに切磋琢磨していることは、寄宿舎生の取得する資格の数の多さにも現れています。

彼らの存在は、当然の結果として自宅通学生にも好影響をもたらすようになり、学校全体が「学びの集団」へと変わりつつあります。今や、水産高校のうち各種検定資格や免許、海技士資格取得では全国トップクラスの成績を挙げるまでになっています。

●「生きる力」を育む水産教育

水産教育は、海・船・水産物を題材とし、つねに自然と対峙する教育です。生命・安全・安心に直結した実践教育は、まさに「生きる力」を育む教育といっても過言ではありません。そして、その教育は隠岐水産高校の脈々と続く伝統的な学校行事や実験実習の中にもあります。

心身ともに逞しく鍛える海洋訓練。

伝統的な学校行事として挙げられるのが、毎年七月、一年生全員を学校に宿泊させ、カッター漕艇（全長約九メートルのボートを一二本のオールで漕ぐ）・徒手訓練・ロープワーク・救急蘇生・溺者救助などを体験する海洋訓練です。大きな壁を設

定し、苦しいこと、嫌なこと、一人では取り組めないことに集団で取り組み、乗り越える集団訓練で、もちろん教職員も全員宿泊し、食事も学校で準備します。四日間でのカッター漕艇距離は一〇〇キロメートルにもおよびます。かつては、ほとんどの水産高校でこのような集団宿泊訓練が実施されていましたが、今も続いているのは本校だけではないでしょうか。

島根県水産練習船「神海丸」。マグロ延縄漁業実習のため「いざ太平洋へ」。

特徴的な実習としては、海洋システム科の二年生による三カ月の乗船実習があります。生徒たちは、大型水産練習船「神海丸（しんかいまる）」（六九九トン）で東南太平洋でのマグロ延縄漁業実習を経験します。船という閉鎖的な空間での三カ月の船内生活を通して、実習生は皆、個々に大きく成長して帰ってきます。

海洋生産科では主にサバなどの缶詰や新巻きザケを中心とする実習製品の製造、厳冬期の養殖カキの出荷実習を行っています。特にサバの缶詰（味付・水煮）は本校のダントツ人気商品であり、年間それぞれ二万缶以上を製造していますが、いつも品薄の状況です。また、新巻きザケも毎年三五〇〇本を製造していますが、注文受付一時間で完売する状況です。養殖カキの出荷作業は厳冬期の実習作業ですが、サケ同様に注文が捌ききれません。同科の入学生は、ここ数年定員を大きく下回り一五名足らずですが、すべての製品で以前と変わらない出荷量をこなしています。本校生徒の能力の高さと成長がうかがえるところです。

●地域貢献に向けた多方面にわたる連携

生徒の日頃の学習内容や研究成果を広く公開するとともにプレゼンテーション能力を育成するために、島内中学生はもとより行政、地元商工会や事業所、地域住民を招いて課題研究発表会を開催しています。海洋環境の保全から地域水産物を利用した新商品の提案、水産物の加工・養殖方法の改良など、水産高校ならではの海・船・水産物を題材にした地域への情報発信の場として、年々、聴講者も増えてきました。

平成二〇年から二二年までの三カ年、文部科学省・水産庁の「水産業の担い手育成事業」指定研究事業に取り組み

製法特許を取得した「えごま鯖缶」。県央にある川本町産の無農薬エゴマの実を利用。

ました。同事業が契機となり「巻き網漁業インターンシップ」「島内企業インターンシップ」「沿岸域の藻場増殖に関する研究」「レンジペレット漂着調査」など、環境省・島根県農林水産部・島根県教育委員会と連携した継続的な取り組みが進められています。

同二八年七月には、地道に課題研究で取り組んできた「えごま鯖缶」の製造技術が「青魚の加工食品、容器入り食品およびその製造方法」で特許庁より特許を取得しました。これは水産高校では全国で初めての快挙です。

また、漁船の大型化に対応すべく、地元巻き網漁業従事者を対象とした免許取得講習を新たにスタートさせました。隠岐水産高校の教育資源を現役の漁業従事者へも還元させる新たな取り組みといえます。

●地域に根ざした水産高校であるために

隠岐の島町の人口は、約一万四〇〇〇人（島内の中学校四校の卒業者数は年約一一〇人）にまで大きく減少しています。本町にある中学校四校からの隠岐水産高校への入学者割合はこの二十数年来二割程度を推移し、二十数名の入学者となっています。また、中学校卒業後に島外の高校へ進学する生徒の割合も約二割となっています。かつては、隠岐水産高校から二十名弱の卒業生が島内企業などに就職していましたが、平成二九年三月の卒業生は、内航船や海洋関連産業を中心に島外への就職者が増加し、島内就職者はわずか四名という状況です。一方で、島内の求人は年々増加しており、島内就職者を増やし、若年人口の流失を食い止めることは、島の将来を考える上で喫緊の課題となってきています。

そこで、①町内中学校からの隠岐水産高校への入学者数を三割強にする、②県外から隠岐水産高校へ入学した生徒の地域定住を図る、などの対策が考えられます。隠岐水産高校の強みをより一層磨き、生徒たちの活躍による学校の活性化や魅力化を通し、「生徒一人ひとりが輝く、離島に存在する水産の専門高校」として、これからもその使命と役割を担っていきたいと考えています。 ■

池田速人（いけだ はやと）
昭和34年生まれ。島根県隠岐の島町出身。大学卒業後、隠岐水産高校で教諭・教頭として勤務。浜田水産高校校長を経て、平成27年4月より現職。専門教科は水産。